

東日本大震災体験文集

「塩竈っ子へ」より

震災から1年後の平成24年3月、塩竈市教育委員会は「東日本大震災体験文集 3・11 塩竈っ子へ」を発行しました。

この「塩竈っ子へ」には、教職員、保護者、地域住民、そして児童・生徒の手記とともに、震災以降に整理された「学校防災マニュアル集」が掲載されています。

ここでは第1集から小学生の、同年12月に発行された第2集から中学生の手記の一部を選んで転載します。（表記は原文のママとしました）

普通に生活できることの幸せ

第一小学校 6年 阿部 真由子

3月11日2時46分、私は教室にいた。学年はバラバラで、先生がいなくて不安や心配でいっぱいだったが、すぐに避難訓練のとおりに着いて校庭に避難することができた。外は雪が降り出し、たくさんの人が泣いていた。私は、（きつと夢だ。こんなことあるわけない!）と思ったが、時間が経つにつれ、（本当なんだ・・・）と実感がわき、恐ろしくなってきた。

その後、すぐに体育館に移動した。強い余震が何度も来て、とても怖かったが、同級生が全員いるだけで安心できた。少し落ち着くと、たくさんの人が避難してきた。が、水も電気も使えないので大変だった。

暗くなっても余震は続いた。全校の3分の2は帰ったが、私は学校に泊まるこ



塩竈市立第一小学校

とになり、薄暗い中、ご飯を分け合って食べた。その後、やっと入ってきたラジオからの情報に、私はショックを受けた。それ

れは、幼い子をはじめたくさんの人が亡くなったというものだった。悪夢を見ているかのように、頭の中が真っ白になった。それと同時に、帰った友達や家族のことが心配になった。頭では（大丈夫、きつと大丈夫。）と思っ

ていても、悪いことばかりが浮かび、涙が止まらなかった。翌日、私はようやく家に帰ることができた。家では、みんなが協力して、元のとりの生活に戻そうとしていた。私も家族のためにたくさん手伝いをした。数日間、電気や水、ガスが使えない日々が続く、これまでにない苦労を味わったが、その間、ずっと家族の温かさやありがたさ、絆を改めて感じていた。

長い春休みが終わり、久しぶりに学校で友達と会った。その日は短い時間だったが、地震後で一番楽しい時間だった。やっと普段の生活に戻ったような気がした。

その後は、世界中の人から支援物資や励ましの言葉が届いた。本当にたくさんの人に支えられて、一小は復旧したんだと私は思う。本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。

私は、震災を通して友達の大切さ、避難訓練の大切さなど、たくさんのことを

学んだ。その中でも特に命の大切さ、普通に生活できることの幸せを感じた。この震災で学んだことを忘れずに、これからの人生に役立てていきたいと思う。

東日本大震災

第二小学校 4年 松山 柊太郎

3月11日金曜日午後2時46分。それは起きた。ゴゴゴゴゴ。という大きな地鳴りが地面の下からつき上げてきた。それと同時に、学校がはげしくゆれ始めた。

「地震だ。」

ぼくは、一しゅんに分かった。ぼくは今までにない「きょうふ」を感じた。みんながいつせいに机の下にかくれた。数秒で電気が消え、机やイスがたおれ周りの教室ではひめいが聞こえた。それでも、学校はようしゃなくゆれ続けている。こわくて仕方なかったぼくに、となりの友達が、「大じょうぶ。すぐおさまるよ。」と、声をかけてくれた。なぜか、ぼくはとてつもない安心感をもった。そして、先生の指示にしたがって、雨の校庭にひなにした。ぼくは、家の人が迎えに来るのを今か今かと待っていた。

2時間後だったか、3時間後だったかおぼえていないが、遠くの方から

「柊太郎、柊太郎」

という声が聞こえ、お母さんが迎えに来てくれた。毎日、聞いているお母さんの声が、こんなにうれしいと感じたことはなかったかも知れない。そして、ぼくは、



『3.11 塩竈っ子へ～学校防災マニュアル集～』《第1集》《第2集》



お母さんたちと一しよに一たん家に戻った。家の外見は何ともなかった。

中に入って見ると、茶の間、しん室、2階の部屋は、ぐちゃぐちゃだった。その日は、まだ大きな余震が来るかも知れないので、かたづけはしなかった。

食べ物やかい中電とうなどをリュックサックにつめこんでいく。遠足以外でリュックサックに物をつめたのは初めてだ。いつもは、リュックサックに物をつめるとき、明日のことでわくわくするが、今日はそうはいかなかった。

全ての荷物を持って車に乗った。今夜は車でねることにした。でも、なかなかすることができなかった。明日起きたら夢であってほしい、と思った。

それから6ヶ月ぐらいたった今。あの時の地震から、ぼくの生活は、ほとんど元通りになった。ただ、ぼくの頭の中には、まだあの時のきょうふがしっかりとこっている。地震や津波でこわかったことも。そして、学んだことも、たくさんある。人が困っている時は助けてあげることや、地震や津波が起こった時にはどこへにげればよいのか、ふだんから食べ物をためておくことなど。ぼくは、この大震災を神様が人間に与えた試練だと思っている。

「人間は楽ばかりしている。」と、神様は思ったんじゃないかと、ぼくは思う。

宮城をふくむ東北各地で農産物や水産物の被害など、今回の東日本大震災で大きな被害を受けた。ぼくの住む港町、塩竈も海に出られなくなり、魚がとれなく

なった。とても悲しい。

今は、少しでも元氣な塩竈に戻れるように、ぼくもできる範囲で協力できたらうれしいと思う。



詩「あさ」

第三小学校 3年 佐藤代伍

金曜日に

地しんが来たとき

みんな ないていた

世界で三番目に

強いじしんだった

近くまでつなみが来た

でも あんなに海が遠いのに

つなみが来て びっくりした

となりの家の

ピンクのバラが顔を出していた

ちよつとしぼんでいる

地しんがきて

シヨックをうけたのかな？

（「ことばの移動教室」から）



3月11日

月見ヶ丘小学校 6年 佐藤昭徳

3月11日、ぼくは学校にいた。

次の授業は、体育でバスケットボール。

どうやって戦うかを考えながら教室で体育着に着がえていた。

そこで、地震が起きた。「ガタガタ」ぼくは机の下にもぐった。すぐおさまるだろうと思っていた。しかし、「ガタガタガタ」ものすごい揺れが来た。テレビがたおれ、本だなもぐちゃぐちゃで、蛍光灯も落ちてきそうだった。そんな揺れが何分も続く。ぼくは必死に揺れで持つていかれそうな机にしがみつく。とてもこわかった。これが前から言われている「宮城県沖地震」なのかと思った。

それから、5月におばあちゃんが住んでいる雄勝町に行った。雄勝町は津波の被害を受け、町が全めつ状態に近かったけれど、おばあちゃんの家は高台にあり、家も家族もみんな無事だった。お父さんが避難所にいるおばあちゃんたちを迎えに行ったときは、町の中心部は何もなく

なっていたそう。

（そんなばかな。）

そう思っていた。しかし、ぼくが行った時もお父さんの言うとおりでた。いつも通っていた魚屋さん、コンビニ、家、全部なくなっていた。

もう信じられない景色だった。悲しくてしかたなかった。

ぼくは、地震は大切なものを一瞬でこわしてしまふ、おそろしいものだと思えて感じさせられた。そして、いつも当たり前前に思っていた生活が、とても幸せなことだと思つたし、こういった災害には何が必要なのかを知つた。これからの生活で節水、節電、備えを心がけたい。

ぼくは、本当に幸せ者だと思つた。大切な家、大切な人を失っている人もいるのに、すべて残されている。このことに感謝し、被災した人たちのためにできることを探して、行動していきたい。



大しんさいを経験して

浦戸第二小学校 4年 本郷 笙吾

3月11日の地震の後、みんなで交かん日記を書きました。先生がみんなの家を回ってとどけてくれました。ぼくはみんなの作文を読んで、みんなが無事なことが分かったけど、すぐく大変で心配になりました。学校に行ったり、友達に会ったりしたいと思ったけど、自分の家のことでせいっぱいで、そんながことできるようなじょうたいではありませんでした。

この作文はその時、みんなでがんばろうという気持ちで書きました。

大地震が起きてからもう18日もたちました。ぼくの家は、電気や水道などのライフラインが正常になりました。でも、友達の家や、いとこの家はまだライフラインが正常になっていないので、ぼくの家にとまりに來たり、お風呂に入り來たりしています。身近な人たちがまだ、すぐく大変だということがよく分かりました。

学校のある浦戸の島の人たちは、もつと大変な思いをしているでしょう。津波で家も仕事もうしなったり、余震で毎日こわい思いをしている島の方々のことを思うと胸が苦しくなります。ぼくはみなさんの役に立ちたいのですが、何をしていいか分かりません。和人君、今何がほしいですか？ こころさん、ちゃんとねむれていますか？ あやなさん、

ももかさん、ごはん食べていますか？

島の中学生のみなさん、元気ですか？

みんなのことが心配です。ぼくにできることがあったら、何でも言ってください。

みんなに会える日を楽しみにしています。

あれから1年近くたって、ライフラインはほとんど正常にもどってきました。学校はいつもと同じ生活にもどりました。でも、島の方々は変わりはてた島のかんきょうの中で、悲しんでいるのではないかと思います。島の人は、ぼくたちがあいさつをすると、とてもよろこんでくれます。きつと、ぼくたちの元気なすがたを見ると気持ち明るくなるんだと思います。だから、これからも、元気のいいあいさつをしたり、勉強をいっしょうけんめいしたいと思います。それが、自分にできることだと思います。



詩「たくさんの手」

杉の入小学校 5年 貴田 琴音

「遊びにいくよ」

こう言って、私の手を引いて、よく公園に連れて行ってくれた

おじさん。

その大きなかたい手を、

私は忘れない。

あのやさしい笑顔を、

いつも、両手をくっつけて

「手と手を合わせてしあわせ」と言っていた、

あのうれしそうな顔を、

私は、忘れない。

水がこんなに大切だったなんて。

水を手に入れることが

こんなにたいへんだったなんて。

私は給水所へ行くたびに、

ほんとうにそう思った。

「こんな生活いやだ」

でも、そんな中、

給水所の長野県から來たお兄さんは、いつもやさしく

手を差しのべてくれた。

お兄さんも不安だろうに。

お兄さんにも

自分の家族がいるだろうに。

私はいつも、

そのやさしいお兄さんの手に

ペットボトルを渡し、

そのお兄さんの手から

受け取っていた。



私は、

このお兄さんの手を決して忘れない。

地震で校舎が大きくゆれた時、

クラスメートの手が差し出された。

「だいじょうぶ？」

この手が、

私を校庭に連れていってくれた。

寒くてふるえていたら、

この手が上着を貸してくれた。

お母さんがむかえに來るまで、

この手は泣いている私の肩を

ささえてくれていた。

私は、このクラスメートの手を
ぜったいに忘れない。

私は、たくさんの手に守られてきた。

この忘れられないたくさんの手に：。

※河北新報「ありがとうの詩」掲載作品

東日本大震災を経験して

玉川小学校 6年 和田 野葵

3月11日、東日本大震災が起こった。その時は、学校の体育館にいた。強くて長い揺れで、とても怖かった。教室にいた人たちが、次々に体育館に避難してきた。その間、何度も余震が起きた。私は、どんな不安になった。中には、泣いている子もいて、みんなでぐさめ合いながら、家族が迎えに来てくれるのを待った。

お母さんが迎えに来てくれた時、私は安心して涙が出た。家に帰ると、おじいちゃんとおばあちゃんが心配して来てくれた。今考えると、おじいちゃんとおばあちゃんの会社は、仙台新港のすぐ近くにあり、地震直後すぐに私の家に来てくれたから助かったのだと思う。

妹も幼稚園から家に帰っていたので無事だった。ただ、お父さんと連絡がとれなくて、とても不安だった。何度も電話したけど、つながらなかった。みんなで心配していると、夕方6時位にお父さんから電話が来て、家族全員で無事を喜んだ。

地震で停電になったので、夜は真っ暗だった。家にあった口ウソクで過ごした。水も出なくなり、トイレは、お風呂にたまっていた水をくんで流した。

次の日、お店が全部閉まっていたので、食べる物に困った。飲み水も近くの神社にくみに行って大変だった。水や電気、ありがたみが初めて分かった。

電気は三日で、水は六日で使えるようになった。電気がついた時、水が出た時は、

本当に嬉しかった。寝ないで働いてくれた電気会社や水道局の人たちに感謝したい。

電気がついてテレビを見たら、信じられないような映像が流れていた。津波で家々が流され、たくさんの人たちの命が犠牲になっていたのだ。私は、ショックを受けた。福島の子力発電所も爆発していた。

これから日本はどうなるのだろう。復興するには、どのくらいかかるのか分からないけれど、私は、私のできることをしたいと思う。水や電気をむだ使いたくない事。家族や友達や自分の命を大切にしたいと思います。



社会の一員として

第一中学校 3年 佐澤 和幸

我が家では、あの震災以来ほぼずっと続けている取組があります。巨大な復興支援プロジェクトや、ボランティアの方の活躍に比べてしまうとささやかですが、それは「節水」です。

食器を洗う時は水を細く出すことはもちろん、すすいだ後の排水はトイレに流すために使っています。また、排水を出来るだけきれいにするために、油などの付いた皿は洗う前にぼろ布で拭くようにしました。これらの取組は、ただ節水ができるだけでなく、ゴミの再利用ができる、洗剤の使用量を減らすことができる等、環境への影響を少なくすることができ、私達にとっても良い点が多くあります。

しかし、私も家族も始めから積極的に取り組めたわけではありませんでした。この取組を始めたきっかけは、震災による断水でした。その時は断水が復旧したら震災前のような生活に戻ることになっていました。不便な生活に耐えているうちに水道が復旧しました。しかし、ほんとと安堵したのも束の間、また節水を始めることになりました。それは、母が汚水処理場の復旧が2年ばかりそうだということを知ったためです。それから、少しでも復旧に貢献できれば、という思いで再び節水を始めたものの、一度震災前に戻ってしまった生活習慣を再び節水に向けることはなかなか難しく、つい水を使いすぎて母から度々注意を受けました。内心、自分達が節水することは、復

興にとつてどれほどの影響があるのだろうかと考えていました。

そんなある日、節水が身に付いている自分に気が付きました。面倒に思っていた節水が自然と出来るようになっていました。現在は汚水処理場がほぼ復旧したことを受けて、台所排水をトイレに流す為に使うことはしていませんが、節水の習慣は身に付いています。

私は、一人ひとりが社会の一員ということとを認識して行動することが大切だと思います。我が家を例にとつても、各個人や家庭でのそれぞれの行動は微々たるものですが、一人ひとりの力が合わさることによって、大きな力になると思います。十代の時に一人ひとりの行動の重要性を身をもって実感することは、自分達が未来を担う存在となった時に、社会の形成者として、日本を変えていく原動力となると思います。



未来へ伝えること

第二中学校 2年 石戸 みさと

東日本大震災。今までに体験したことのないあの恐怖を決して忘れることはありません。

発生の時、私はかぜをひいていて小学校を休み、母と姉と共に自宅にいました。揺れは少しずつ激しさを増して襲ってきました。私はどうすることもできないまま、揺れがおさまるのを待ちました。その後三人で高台にある祖父の家へ避難しました。

数日後、ラジオで津波の被害を知りました。そして石巻にいる二人のいとこが心配になりました。震災から約1週間たつて、やっといとこ達と再会することができました。無事な姿を見て、私は涙があふれてきました。

いとこは津波の被害に遭いました。弟は小学校に、兄と母親は自宅にいました。小学校では、津波は予想を超えて、3階、4階へとかけ上がりました。その後母親が迎えに来るまでもとても不安だったと聞きました。自宅では2階の天井近くまで津波が上がってきて、私が小さい頃からよく行っていた家が思い出と共になくなってしまいました。

あれからもう1年半が経ちました。塩竈ではヒビが入っていた道路も整備され、駅前のがれきも片付けられました。あの大地震は夢だったのかと思うこともあります。しかし、石巻、気仙沼、そして原発事故が起きた福島県沿岸部ではまだまだ復興が進んでいません。地震は物だけではなく、大

切な命も奪っていききました。津波に流されたまま、帰ってこない家族を待つ人、友達が遠くに避難してしまい淋しい思いをする人など、心に傷を負った人がたくさんいます。

しかし、今回の震災を思い返してみると、悲しいことばかりではありませんでした。被災地には、全国、世界中からたくさんの支援物資が届きました。

中にはメッセージもあり、とても温かく勇気をもらいました。そして、人とのつながりも強く感じました。お互いに支え合いながら、少しずつ前のように、前以上に街は復興していくんだなと思いました。

他にも命の大切さ、普通の生活ができていくことの喜びを感じることができました。

今後、震災の経験を一人一人がしっかりと受け止め、将来また大きな地震があった時に生かせるよう、未来へと伝えていく必要があります。

また、先ほど述べたとおり、今、復興の程度は地域によって大きな差ができています。塩竈はもう支援を受ける側だけではなく、支援する側にもなったのだと思います。まだ中学生の私には何もできないかもしれませんが、完全な復興までには10年、20年、またはそれ以上かかるでしょう。しかし、その時は私達が東北を支える力を持つことになります。その時には、思う存分に力を発揮したいと思います。



誰かのために

第三中学校 1年 飯淵 恵太

私は中学校に入学して、バスケットボール部に入りました。初心者なのに練習の全てが初めての体験で、疲れますがとても楽しく取り組んでいました。

今年の6月12日。三中にNBAの選手が来ました。初めて見たNBAの選手は、背が高く手足が長くてびっくりしました。言葉が通じないのでとても緊張しましたが、練習が始まると楽しい雰囲気となり、すごく楽しい時間を過ごすことができました。NBAの選手と一緒に練習ができるといふ、最高の思い出ができました。

このような体験ができたのはなぜか。それは、東日本大震災の支援を目的に作られた「TOMODACHIプロジェクト」の取組のひとつであることを知りました。私にとって東日本大震災は、すごい揺れで大きな津波が襲って来て、家の周りが変わり果ててしまうという、忘れることができない悲しい体験でした。誰かが悲しい思いを

している時、自分の好きなことや得意なことと励ますことが出来るということは、とても素敵なことだと思います。今回の震災では、私以上に辛い悲しい思いをして、今も苦しんでいる方々がたくさんいます。だから、日本中だけでなく世界各国から多くの励ましが届けられているのだと思います。私は、震災当時は何もできませんでした。そして、周りの人たちにやってもらってばかりでした。これからは自分が人を励ましたり、手を差し伸べたりすることができ、人になりたいと思います。そのためには、学校の勉強や部活動などに積極的に取り組み、自分を高めていきたいと思います。この震災はとても大きな被害が出ました。しかし、この震災がなければこんな世界が日本に手を差し伸べてくれることがなかったと思います。震災から1年以上経過し、震災が昔のことのようになってきたように感じます。だけど、震災のことは忘れていけないし、震災で経験したことを語っていかなければならないと思います。そして、あの震災があったから今の自分たちがいることを忘れないでいきたいです。



風化させないことは？

玉川中学校 2年 阿部 優希瑚

私は、東日本大震災後4日目くらいから父の手伝いで支援を始めました。私が最初に行った場所は陸前高田市です。

陸前高田市には、全国から送ってもらった学用品を子供たちに配付しに行きました。そこで同じ年の子と友達になることができました。そして陸前高田市の友達にも学用品を配付する仕事を手伝ってもらいました。私は、そこでいっしょに作業をしているときに聞いた、その子の友達の話が今でも心に残っています。

その子の友達は地震の後、幼なじみの子のお母さんが迎えに来てくれ、家に帰り始めました。しかし、帰っている途中で津波で流されてしまい、亡くなったそうです。もう二度と会うことも、お話することもできなくなってしまう、今はとても寂しく、とても辛いと言っていました。

陸前高田市の友達のように、現在でも辛くて寂しい思いをしている人たちがいっぱいいます。そんな人たちがいることを私たちは忘れてはいけません。最近、「震災を風化させないで」という声を聞きます。しかし、単に地震や津波があったことだけを語り継ぐことだけが「風化させない」ということなのでしょうか。私は違うと思います。あの地震や津波でどれだけの人が犠牲になり、時間の経過にともなって被災地ではどんなことが起きていたのか。

また、それはどのように解決されていったのか。それらすべてを語り継ぐことが、「風化させない」ということではないかと思えます。そしてそれが陸前高田市の友達のよう、現在でも辛くて寂しい思いをしている人たちがいっぱいいます。そんな人たちがいることを私たちは忘れてはいけないと思います。

今回の東日本大震災では、阪神淡路大震災や、新潟中越沖地震での反省が生かされていなかったと思います。それは、過去の大きな災害の出来事が十分に伝わらず、広く様々な人たちの記憶に留まらなかったためだと思います。私たちの記憶の中で各地の大きな災害がだんだんと風化されてしまったからだと思います。

私は、被災したたくさんの人たちや、震災で亡くなったたくさんの方の命、残された人たちの苦しみを無駄にしないように、これからも多くの人たちに伝えていきたいと思っています。



今の気持ち

浦戸中学校 1年 内海 桃花

あの日、私は家にいました。あの時、みんなの生活を一変させたのは「東日本大震災」です。

私たち家族の生活を一変させた、あの大地震、大津波は私たち日本人にとって忘れることのできないもの、そして、私たち人間の記憶に深く刻み込まれた一瞬の出来事になりました。

忘れた人、忘れない人もいるかもしれませんが、私は忘れてはいません。忘れたくありません。

私たち家族の「絆」を深めてくれた時でもあります。祖父との忘れることができないたくさんの方の思い出が詰まった家を失うという悲しい時もありました。しかし、祖父はそんな状況でも何一つ文句は言っていないませんでした。母にとっても、自分が子供の頃から育ち慣れた実家を失いました。島が大津波のせいであちやめちやになっちゃったことで泣き崩れていました。泣き崩れた母を、当時小学5年生だった私は慰めるしかありませんでした。

今、私は中学生になりました。片付いてきたところもありますが、大津波の爪痕がなくなった訳ではありません。でも、震災前の姿よりも、今の姿のほうが私は好きです。なぜなら、にぎやかだった家や人々の姿はありませんが、新たな道へ進み出しているという成果が見えているような気がするからです。新しい建物ももう少しで完成するので楽しみです。

東日本大震災から、二回目の夏をむかえました。あの日は、まだ冬で雪も降り寒い日でした。

あのとき私一人でしたらどうなっていたかと振り返って考えてみると、悲しくさびしい気持ちになります。1年半経った今でも。あの日、あの一瞬の時間が来なければ。そんなに悲しくなくてもよかったのに。そう思った時もありました。でも反対に、あの一瞬があったから、友達も増え、いろいろな支援をしてもらえたのだと感謝しています。

今も、支援し続けてくれた方々に「ありがとう」と言いたいと思っています。



浦戸中学校屋上より